

第二十九回 猊亭おうていに戦いくさいて先主讎人あだびとを得、陸遜營りくそんえい七百里を焼く

—— 夷陵いりようの戦いくさい ——

(前回から今回まで)

かくして、劉備は大軍を率い、関羽と張飛の息子である若き関興かんこうと張苞ちようほうが先鋒となつて、長江を攻め下ります。当初、戦いくさいは蜀軍に有利に展開します。関興と張苞の活躍はフィクションですが、若き後継世代の二人を大活躍させます。劉備は若い彼らの活躍を喜び、昔からの大将たちは歳をとってしまったなあと、つい口をすべらします。

黄忠わうちゆうはこれを聞いて憤激はんげきし、わしはまだ老いぼれてはいないぞとばかり呉軍に戦いくさいをいどみます。そして敵の先鋒潘璋はんしょうと戦いくさい、重い矢傷やきずをうけてしまいます。そして、劉備に「私はこの歳まで生きて寿命じゆみゆうに不足はありません。陛下てんかはご自愛じあいされ、大業を果たしてください」と言い残し、息をひきとります。七十五歳でした。なんともいえない爽快感すうかいが漂ただよう、老将黄忠の最後です。

こうして関羽・張飛につづき、黄忠もなくなります。蜀の「五大將軍」で残るのは、趙雲と馬超の二人になります。このとき、呉の方でも歴戦の勇将甘寧かんねいが戦死し、『三国志演義』

の第一世代の人々が、次々と舞台から退場していきます。

このとき関興は、父関羽を生け捕りにした呉の大将潘璋はんしょうを追いかけますが、山中で道に迷います。

(本文抄)

劉備は勢いに乗って猊亭おうていを手に入れ、軍勢をまとめてみると、関興の姿だけが見えない。劉備は、慌てて張苞らに命じ捜しに行かせた。

関興は呉の陣に突入したさい、父の仇の潘璋かたき はんしょうとばったり出くわしたため、馬を飛ばして追いかけたのだが、潘璋は仰天して山中に逃げ込んでしまい、どこに行ったかわからなくなつた。

関興は、必ず山中にいますと思ひあちらこちら捜したが見つからない。みるみるうちに日が暮れてしまい、月明かりをたよりに、山かげの道にたどりついたときには、もう二更（午後九時から午後十一時の間）になっていた。そこに田舎屋敷が一軒あったので、馬を下り門を叩くと、老人が現れた。

関興が、「私は合戦中かっせんちゅうに道に迷い、ここまで来てしまいました。どうか一夜の宿を貸して

「いただきたい」と言うと、老人は中へ案内した。

見れば、室内はあかあかと燭が灯され、正面には関羽の肖像が祀つてあるではないか。関興は大声で泣きながらひれ伏した。

「將軍、どうされたのですか」と老人。

「これは私の父です」と関興。これを聞くと、老人ははつと平伏した。

「どうして父を供養してくださっているのですか」と関興が聞くと、老人は答えた。

「このあたりではみなお祀りしております。ご在世中からどの家でもお祭りしておりますが、今は神さまにおなりになったのですから当然のことです。一刻も早く蜀の軍勢が仇討ちに来てくれるのを、ひたすら待つておりました。今、將軍がここにおいでになったとは、これほど嬉しいことはありません」

かくて酒食の支度をしてもてなし、馬に秣を与えた。

三更（午後十一時から午前一時の間）過ぎ、ふいに表で誰かがまた門を叩いた。老人が外へ出てたずねると、なんと呉の大将の潘璋もまた宿を求めて来たのだった。潘璋が中へ入ったところ、その姿を目にした関興は剣に手をかけて、大声で一喝した。

「逆賊、逃げるな」

潘璋は身をひるがえして逃げ出したところ、門の外から、熟したナツメのような赤い顔、鳳凰ほうおうの眼かいこに蚕まゆのような眉まゆ、三すじの美髯びぜんをなびかせ、緑の戦袍せんぼうに金の鎧よろいを身につけた人物が、劍をにぎって入って来た。潘璋は関羽の亡霊だと知って、あつと叫んで身をひるがえそうとした瞬間、関興の手から劍がふりおろされ、その場に斬り倒された。

関興はその心臓をえぐり出し、血をしたたらせながら関羽の霊前れいぜんに捧げた。かくて関興は父の青龍偃月刀せいりゅうえんげつとうを取りもどして、潘璋の首を斬り落とし、馬首にくくりつけると、老人に別れを告げ、潘璋の馬に乗って、本陣へともどって行った。

(解説)

関興が道に迷って山中の一軒家にたどりつくとき、そこに潘璋もやって来て、潘璋は関興を見て逃げ出しますが、関羽の霊が現われて驚くところを、関興に斬り殺されます。

潘璋は、かつて関羽を捕らえた手柄で、孫権から関羽のシンボルである青龍偃月刀を与えられていました。ここで、その青龍偃月刀が、関羽の息子関興の手に戻ってきます。

こうして、関羽は死後も姿を現し、その恨みを晴らしていきます。前にも触れましたが、作者は拔群の存在感がある関羽を去らせ難く、死後も『三国志演義』の世界にとどまらせた

のですが、一方で、剛情で負けず嫌いな性格の関羽が、死後も仇ある人に祟るといふ設定は、違和感なくすつと心に入ってきます。張飛では、こうはいかないと思います。

関羽は死後、自らのシンボルである青龍偃月刀も取り戻したのです。それにしても、関羽の凄まじい執念を感じさせる場面です。

荊州で呂蒙に降り、関羽敗死の原因をつくった糜芳びほうと傅士仁ふしじんも、呉を見限って帰ってきたところを関興に殺されます。また、張飛を殺して呉に出奔しゅつぽんした范疆はんきやうと張達ちやうたつも、孫権によって劉備のもとに送り帰されると、張苞が二人を斬って父の霊前にささげます。

かくして、関羽・張飛の死に関係した人物はことごとく死んでしまいます。

ここで、馬良が呉と和平すべきだと進言しますが、劉備の怒りはおさまらず、あくまでも呉を滅ぼそうと、巫ふ（四川省）から秭帰しき（湖北省）へと進軍します。

しかし、呉の若き名将陸遜りくそんが総大将に拔擢はつてきされると、しだいに劉備軍の旗色はたいろが悪くなりま

（本文抄）

一方、劉備は流れに乗って攻め下り、長江に沿って水軍基地を築きながら、深く呉の領内

に入り込もうとした。

と、黄権こうけんが諫めて、

「水軍が長江に沿って攻め下る場合、進むのは容易ですが、退却するのは困難です。私が先鋒をつとめますので、陛下には万一に備え、どうか後方に陣取ってください」

劉備は「呉の逆賊どもは震えあがっている。朕ちん（皇帝の一人称）が前進するのに、なんの障りがあるものか」と言い、一同が口々に諫めても耳を貸さない。かくして、軍勢を二手に分け、黄権に長江の北側の軍勢を率いて魏軍の進攻に備えるよう命じ、劉備はみずから長江の南側の軍勢を率いることにした。かくて長江を挟はさんで南北に陣營を設置して進撃しようとした。

間者かんしやがこの情報を探り出し、急いで魏主（曹丕そうひ）に知らせ、蜀の軍勢が呉を攻撃し、東西南北、七百余里にわたって四十余りの陣營を連ね、そのすべてが山林に依よっていること、また、黄権が軍勢を率いて長江の北岸に陣取り、連日、斥候せつこうを百里余り先に出しているが、どういう意味かわからないことを報告した。

曹丕はこれを聞くとからからと笑いながら言った。

「劉備は負けるぞ」

臣下たちがそのわけを聞くと、曹丕は言った。

「劉玄徳は兵法がわかっていない。七百里も陣營を連ねれば、敵を防げるはずがない。また苞（草木が生い茂ったところ）・原（地形が高くて平らな場所）・湿（水気の多い湿った場所）・險阻（地勢の険しいところ）など、複雑な地形に駐屯することは、兵法の大いに忌むところだ。劉備は呉に敗れるに相違ない。十日以内に知らせが必ずとどくだろう」

（中略）

蜀に到着した馬良は諸葛亮と会い、絵図を差し出して言った。

「今、陣營を移動して、長江を挟んで七百里にわたり四十余りの陣營を築いておりますが、すべて溪谷に沿い、樹木の生い茂った地点です。天子の命を受け、丞相（諸葛亮）に絵図を持ってまいりました」

諸葛亮は見おわると、机を叩いて嘆息し、「誰が主上にこんな陣形を勧めたのか。そやつを斬れ」と言った。

「すべて主上ご自身のお考えです。他の者の計略ではありません」と馬良。

「漢王朝の命運は尽きた」と、諸葛亮はため息をついた。馬良がわけを聞くと、諸葛亮は言った。

「苞・原・湿・險阻の複雑な地形に陣營を築くのは、兵法の大いに忌むところだ。もし敵の火攻めにあえば、救いようがないではないか。また、七百里も陣營を連ねれば、どうして敵を防ぐことができようか。禍は目前だ。陸遜が堅く守って出撃しなかったのは、これを待っていたからだ。きみはただちに戻って、陣營の配置を改めよ。このままではいけない」

「もし、すでに呉が勝利を得ていたら、どうしましょうか」と馬良。

「陸遜は追撃して来ないから、成都は大丈夫だ。心配はない」と諸葛亮。

「陸遜はどうして追撃して来ないのですか」と馬良。

「魏軍がその背後を襲う恐れがあるからだ。主上が万一、敗北されたら、白帝城（四川省奉節県）に向かい、難を避けよ。蜀に入る際、私はすでに魚腹浦に十万の軍勢を潜伏させておいたから」

「私は何度も魚腹浦を通りましたが、兵士の姿を見かけたことはありません。丞相はどうしてそんな冗談をおっしゃるのですか」と、馬良は仰天した。

「そのうちわかるだろう。黙って見ていろ」と諸葛亮。

劉備軍の陣營は、七百里余り（約三百キロ）にわたって点在し、それを聞いた曹丕は、劉備は必ず敗北すると断言します。馬良もまた不安を感じ諸葛亮に尋ねに戻ると、諸葛亮は、敵が火攻めをしたらひとたまりもない、すぐに配置を変えよ言います。

黄権も危ぶみ、劉備に後方に居るよう進言しますが、劉備はこれを聞かずに軍を率いて夷陵に駐屯します。

兵法の常道を知る曹丕・諸葛亮・馬良から見れば、劉備軍の配置は無謀なものだったので。しかし、前線は蜀から遠く離れ、しかも険難な峡谷に取り囲まれています。補給の継続という点からみれば、陣營を長江沿いに点在させることは、やむを得なかったのでしょうか。また、劉備には実戦で鍛え抜かれた勝負勘があり、結果的には大敗北しますが、机上の兵法とは違った彼の判断があったのでしょうか。

かくして、劉備の最後の戦いである「夷陵の戦い」がはじまります。

劉備率いる蜀軍は、長途の遠征によく疲れの色が見えはじめます。ここまで隠忍自重して機を窺っていた陸遜は、試しに攻撃をしかけて蜀軍の様子を見ようとしています。そして、最初の攻撃こそ失敗しますが、そこから火攻めをしかければ蜀軍を打ち破ることができるかと判断したのです。

(本文抄)

さて、劉備が本陣であれこれ呉を破る計略を考えていると、とつぜん陣幕の前の軍旗が風もないの倒れたので、程畿に「何の予兆ていきだろうか」とたずねたところ、程畿は言った。

「今夜、呉軍が夜討ちをかけて来るのではありますまいか」

「昨夜、一人残らず討ち取ったのだから、二度と攻めて来ることはないだろう」と劉備。

「昨夜の攻撃が、陸遜の小手調こてしらべなら、どうなされますか」と程畿。

と、話し合っている最中、呉軍がこぞつて山に沿い東に向かっていると報告が入った。劉備は、「それはわれらを欺あざむこうとしているのだ」と言うのと、全軍に動くなと指示を与え、関興と張苞にそれぞれ五百騎を率いて巡察じゅんさつに向かわせた。

日が暮れるころ、関興がもどつて来て報告することには、

「長江の北岸の陣営から火の手があがっております」

劉備は慌てて関興を北岸に、張苞を南岸にやつてようすを探らせることとし、「もし呉軍が攻め寄せたなら、ただちにもどつて報告せよ」と命じた。

関興と張苞の二人は命令を受けて出発した。

初更（午後七時から午後九時の間）ころ、東南の風が急に吹き起こり、劉備の本陣の左側にある陣営から火が出た。火を消しに向かおうとしたとき、今度は本陣の右側の陣営から出火した。

はげしい風に煽られて火は勢いを増し、次々に樹木に燃え移り、どっと鬨とぎの聲があたりを震わせた。左右両陣営から軍馬がいつせいに飛び出し、本陣へと殺到したため、無数の者が踏み殺された。後方からは呉軍が猛烈な勢いで押し寄せ、その数もわからない。

劉備は慌てて馬に飛び乗り、馮習ふうしゅうの陣営に向かったが、馮習の陣営からも天を焦こがす炎が立ちのぼった。長江の南岸も北岸も炎に包まれ、まるで真昼のような明るさだった。

馮習は慌てて馬に飛び乗り、数十騎を率いて逃げ出したところ、ちょうど呉將徐盛じよせいの軍勢と出くわし、はげしい戦いになった。これを見た劉備が馬首をめぐらし、西へ向かって逃げ出すと、徐盛は馮習を捨てて劉備を追撃して来る。

劉備が慌てふためいたとき、また前方で一手の軍勢が行く手をさえぎった。これぞ呉將の丁奉ていほう。両側から挟み撃ちにされ、劉備は仰天したが、四方を囲まれ逃げ道はない。その瞬間、突然、鬨の聲が響きわたったかと思うと、一手の軍勢が包圍網を突き破った。これぞ張苞である。

張苞は劉備を救い出すと、近衛軍このえぐんを率いて落ちのびようとした。逃げる途中、前方にまたも一手の軍勢が現れた。これぞ蜀將の傅彤ふとうであった。かくて軍勢を合わせ逃走したが、背後から呉軍が追撃して来る。

やがて劉備は馬鞍山ばあんざん（湖北省宜昌市ぎしやうし）という山に到着した。張苞や傅彤が劉備を守つてこの山に登つたところ、山の麓でまた関の声があがり、陸遜の率いる大軍が馬鞍山を取り囲んだので、張苞と傅彤は必死になつて登り口を固めた。劉備が眺めわたしてみると、野原いっぱいには炎が広がり、累々と積み重なつた死体が長江を塞ぎながら流れている。

翌日、呉軍がまた四方から火を放つて山を焼いたため、將兵は右往左往うわさわうして逃げ惑い、劉備は驚き慌てるばかり。このとき、突然、炎のなかをかくぐり、一人の大將が数騎を率いて山に駆け登つて来た。誰かと見れば、これぞ関興。

関興は平伏すると、「四方から火が迫り、いつまでもここにはおられません。陛下にはすみやかに白帝城に向かわれ、もう一度軍勢を立て直されるほうがよろしいかと思ひます」と要請した。

「後詰めは誰がするのか」と劉備。

「私が命賭けでやらせていただきます」と傅彤。

日が暮れると、関興が先頭、張苞がまんなか、傅彤が後詰めになって、劉備を守りながら山を駆け下れば、呉の大軍は劉備が逃げ出すのを見て、みな手柄を争って天地を覆い尽くすばかりの勢いで、西へ向かつて追撃した。

(解説)

東南の強風が吹くなか、呉軍の攻撃で、蜀軍の四方から火の手があがります。蜀軍は大混乱に陥り、劉備はいったん馬鞍山まで退きます。しかし、ここでも呉軍の怒濤の攻撃に再び大敗します。蜀軍の退路は断たれて逃げまどい、蜀軍の將軍たちが次々と戦死します。さらに、長江北岸の黄権も、蜀への退路を阻まれやむなく魏に降伏します。

(本文抄)

すでに空は明るみはじめていた。前方から天を震わす関の声があがったかと思うと、とつぜん朱然軍の兵士が次々に谷間に転落し、岩の上を滑り落ちて行つた。

と、一手の軍勢が突入し、劉備の救出にやつてきた。

劉備が大喜びしながら、誰かと見れば、これぞ常山の趙子龍(趙雲の字)。

このとき、趙雲は江州（四川省重慶市）に駐屯していたが、呉と蜀が戦いを交えたとき、軍勢を率いて出陣したところ、東南一带に天を衝く火の手があがっているのが見えた。趙雲が、はるかを眺めやったところ、なんと劉備が包囲されているので、勇躍して突撃をかけたのだった。

陸遜は趙雲が来たと知るや、急いで軍勢を退却させた。趙雲は激戦している最中、ばったり朱然と出くわして戦いを交えたが、ただ鎗の一突きで朱然を刺し殺して馬から転落させ、呉軍を蹴散らして劉備を救い出すと、白帝城めざして逃げた。

劉備が「朕は逃げおおすことができたが、ほかの者はどうなったのだろうか」と言うと、趙雲は言った。

「敵軍が迫っていますから、ぐずぐずしてはいられません。陛下にはひとまず白帝城に入って休んでいただき、そのあとでもう一度、私が軍勢を率いて救援に向かいます」

劉備が白帝城に入ったときには、わずか百人余りの配下しか残っていないかった。

このとき、孫夫人（孫権の異母妹で劉備の夫人）は呉にいたが、猗亭で蜀軍が敗北し、劉備も戦場で死んだというわさが流れると、孫夫人は長江の岸辺に行き、西に向いて慟哭すると、長江に身を投げて死んだ。

(解説)

劉備の絶対絶命の窮地を救ったのは、呉への出兵に反対した趙雲でした。劉備の敗戦を知った趙雲は、自分自身の判断で救援に駆けつけ、劉備を救ったのです。『三国志演義』は、いつもながらの趙雲の正確な判断力を描きます。そして、劉備は命からがら白帝城に逃げ込み、蜀軍は慘憺さんたんたる敗北を喫したのです。

呉にいた孫夫人は、劉備が死んだと聞いて劉備の後を追って殉死じゅんししますが、これはフィクションです。

劉備は、皆に合わせる顔がないと言って、白帝城にとどまります。

劉備は、部下の大將たちが戦死したことを知って悲しみますが、長江の北に陣した黄権こうけんが魏に降伏したことを聞くと、「黄権は退路を断たれ、やむなく魏に降伏したのだ。これは自分が黄権に背そむいたのであり、黄権が私に背いたのではない」と言い、もどおり家族を手厚く保護します。また黄権は、魏で黄権の家族が処刑されたというデマが流れたときは、私と劉備や諸葛亮は信頼し合った仲です、殺すはずがありませんと言い切ります。これは『三国志』に記載される史実でもあります。

魏に仕えた黄権は、この後、魏で高位高官を歴任しています。司馬懿は黄権を高く評価し、諸葛亮に送った手紙の中で「黄権は快男子かいだんしです。いつも貴殿を褒め称え、口にしない時はありません」と述べています（『三国志』黄権伝）。黄権は、劉備と諸葛亮に対する信頼と尊敬を終生持ち続けました。

劉備入蜀の場面で、当時、劉璋の部下であった黄権は、劉備に頑強に抵抗した硬骨漢です。劉備と諸葛亮は、その黄権からこれほどまでに信頼されていたのです。

『三国志演義』は、この本文の後に、黄権が魏に降伏したことを批判する詩を書き入れています。それは蜀びいきの立場から、黄権が蜀から魏に降つたことを「変節」とみなしたからです。「節」に殉じて死ぬべきであったとこの詩は書きます。

しかしそれは、朱子学の「大義名分論」や「君臣の別」などが、世の中に影響を及ぼした時代の価値観です。そのような形式主義だけでは、現実の場で生きぬいた人間の心は、残念ながら伝わってきません。

この時代は、君主と臣下であっても、時には膝をまじえて意見を交わす場面が多くあります。後世よりも、君主と臣下の関係が親密でした。それが、時代が降るとともに、臣下は椅子に座ることが許されず、さらには立つことさえ許されない時代になっていきます。そうし

た時代の価値観を支えたのが、朱子学の形式主義でした。

三国時代は、多くの英雄豪傑がその仕える主人を変えています。例えば関羽と交友した魏の名将張遼ちやうりやうは、三回も仕える相手を変え、最後に仕えたのが曹操でした。黄権は、はじめ劉璋に仕え、次が劉備でした。そして、黄権が仕えた年数が一番長いのは、最後の魏だったのです。劉備に八年、曹丕に十七年です。しかも魏では、車騎將軍・儀同三司しやくしやうぐんという高位の官職にいたっています。黄権の列伝の半分以上は、魏での事蹟じせきです。しかし黄権の列伝は、「魏志ぎし」ではなく蜀の歴史を記した「蜀志しやくし」にたてられています。

そこには、陳寿の深い思い入れがあったのでしょうか。それが何であったかは、想像するしかありませんが、おそらく、魏と蜀に別れても変わらぬ黄権と劉備・諸葛亮の絆きずなに、心をうたれたのだと思います。

このように、中国の歴史書は、時代が遡さかのぼれば遡るほど、息苦しい形式主義とは無縁むえんの生き生きとした人間群像を描きます。その最たるものが司馬遷しばせんの『史記しき』だと思いますが、陳寿の『三国志』もその一つでしょう。